

金門島

三浦隆藏



河出書房新社

Kawade Paperbacks 53

金 門 島

昭和38年8月5日 初版印刷

昭和38年8月10日 初版発行

定価 230 円

著 者 三 浦 隆 藏

発行者 河 出 孝 雄

印刷者 小笠原秀雄

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町3の8

電話 東京 (291) 3721~7

振替口座 (東京) 10802 番

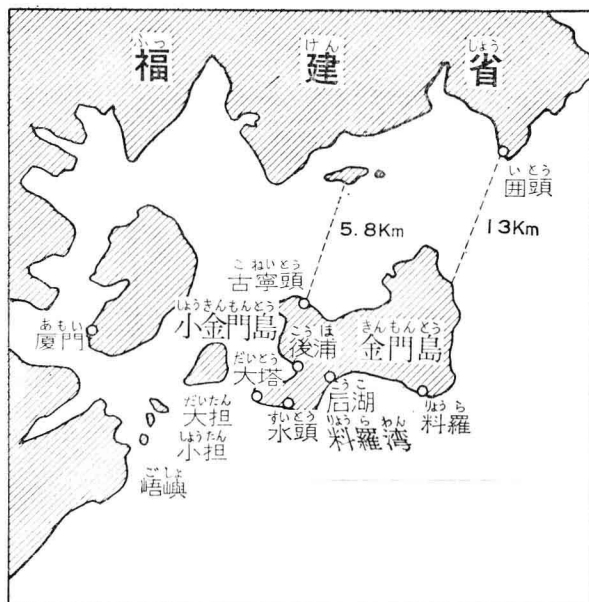
©1953

印刷・秀好堂印刷所

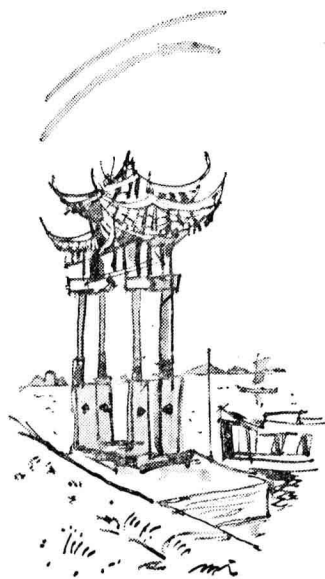
落丁本・乱丁本はお取り替え致します

金門島

〈金門島〉関係地図



第
一
部



沖繩戦が始まってから、部隊はすることがなくなった。毎日遊んで暮らしているうち、私は意外な命令をうけた。

昭和二十年四月二十日 金門島守備隊本部命令——
水頭野戦病院付牧軍医少尉ハ明二十一日十三時ヨリ小林中隊ニ出張シ、救急法ノ訓練ニ当ルベシ

その命令に従って、私はひとり図嚢ずのうをつつて宿舎を出た。裏門から鎮長ちんちやう（村長）の邸に沿って細い石畳を上って行つたが、どの民家も畑仕事に出ていて留守だった。道ばたで、顔見知りの兵隊たちが腰を下ろして雑談していた。近くに駐屯している砲兵隊の連中で、中には服をひろげて虱を探しているのもあった。

坂を上ると、潮の香を含んだ微風があった。水頭の村全体が眩くらゆく一望に広がっていた。この坂の眼下、榕樹じやうじゆの茂みを越した向こうに私たちの野戦病院がある。もとは村の小学校で、火焰木かえんぼくの並木にかこまれた芝生の運動場がある。

ロの字型、一階建ての学校と小さな芋畑を隔てて、聳そえているのは、私たちの宿舎、南洋華僑かきやうの留守宅だった。堂々と二層を重ね、ベランダまでつけている。その隣り、鎮長の邸を含めた一郭が中心で、他の民家はおしなべて小さい。半ば傾きそり返り屋根の瓦も、欠けているのが多かった。

村はずれに白い四角の塔がある。昔、海賊の来襲に備えて作った望楼で、今の小林中隊本部である。その先は濃い榕樹の林に包まれたまま、島の西南端、大塔岬に移る。岬には巨岩が重なり、その上に三層の古塔がくっきりと碧空に浮いていた。海はこの岬をとりまき、厦門の湾深くのびている。目近に浮かぶ小金門島は濃い緑に包まれ、派遣されている一個小隊の陣地さえ、どこかに隠されていてわからない。その後ろに淡く、厦門島が紫の山容を見せている。ほかは、海がねっとりとな方特有の濃い紺青一色にひろがっていた。ところどころに島民の小船や戎克が、動くともなく浮かんではいる。ここに戦いがあるとは信じられない風景だった。

しかし、岬の左には四キロもない海を隔てて、大陸の沿岸が延々と白い崖をつらねて、島を取巻いていた。その崖の向こうには国府軍の軍隊が数万待機しているはずであり、正面の崖に聳える二層の古塔には、情報によると、米軍將校が無電をもって住みこんでいた。敵の監視哨である。敵は島に友軍機や船が近づくと、すぐ無電で在支米空軍を呼

んでくる。目の下の海底は友軍の屍体をもう何十人となく
看んでいるのだ。それに毎日毎晩、敵機は偵察にくる。多
くは私たちを監視するだけだったが、時々気紛れに、銃爆
撃する。

今、この坂上に立った私の姿も、監視哨の望遠鏡が、近
近と捕えているにちがいがなかった。空襲の危険を思うと、
自然に私の頬は硬ばり、早々に坂を下った。家並みに紛れ
て演習予定地、村はずれの閑帝廟に急いだ。

定刻、小林中隊の兵隊は指示通り、廟の境内に集まっ
た。彼らの姿を一目見た時、私は自分の中の一面が彼らと
ひどく似通っているのに気づいた。

微意とも呼ばれる気分だ。兵隊たちは略式上衣に短袴姿
で帯剣もつけず、手作りの草履を履いて、のろろと整列
した。中隊長も准尉もこない。指揮は伍長に任されてい
た。その伍長さえ答礼が終わり皆が石畳の参道に腰を下ろ
すと、眠そうに目を閉じた。中にはむき出しの毛脛をほり
ほり搔きながら、私を見あげる兵隊もある。

前列の右翼では、加藤がにやにやしながら私の動作を見
ていた。立膝を抱えて、狐のような目を細めている。私の
視線が流れるたびにわざと大きくうなずいたりする。彼は
三十五歳、小林中隊長の私設当番兵で——というの、他
に正式任命の当番兵がいたからだ——同時に、隊の補助
衛生兵になっていて、中隊付き軍医を兼務している私が隊

で使える、ただひとりの部下でもあった。

皆の視線の中心に立って、私は図囊から教典をゆっくり
とり出した。さて、何を枕にしゃべればいいか、言葉を探
しはじめた時だった。突然

「空襲ッ」

列の後ろの兵隊が叫んだ。耳をすますと、たしかにうし
ろの山の方から米機特有の金属的な爆音がする。しかも、
音は刻々大きくなり、ここを目ざしてくる。弾かれたよう
に兵隊たちは跳ね起きた。われがちに廟の中へ殺到して行
く。私もその深い軒下に駆けこんだ。のしかかるように爆
音が近づいた。どこで私たちの集合を見つけたものか、三
機編隊のカーチスが屋根すれすれに旋回しだした。出では
危い。体を引くと、敵機は、からかうように飛びすぎなが
ら、搭乗者が一ふり二ふりマフラーを振った。私たちへの
挨拶である。やがて彼らはのり出した体を機内におさめて
悠々と厦門の方へ飛び去った。

「どうして奴らがやってきたのだろう？ 不定期便だぜ」
廟の奥から兵隊たちがぞろぞろ出てきた。皆、夢中で勝
手気儘な臆測をいい合っていたが、そのうち厦門の海軍部
隊のあたりから爆発音が伝わってきた。かすかに地面が揺
れた。

「わかったよ。船が厦門に珍らしく入ってきたのだ」

「それで海軍さんがやられたわけか」

空襲がここに關係ないとわかって、兵隊たちは元氣にな

った。てんでんに景氣のいい冗談をいいだした。けれど、彼らは不意に笑いを止めた。

突然、閉めておいた門が開き、暗い境内が一時にパッと明るくなった。

鮮かな朱の布鞋が扉の陰から現われた。驚いて見はる目に、ピンクの長衫を着た花嫁がかかると思ひ寄ってきた。纏足の老婆が黒衣姿で花嫁の右手をかいぞえしながら、よちよち歩む。それを待ちきれずに、花嫁は歩幅をひろげて長衫をわり、白い太腿をちらつかす。左手の線香が長い煙の尾を引いた。

兵隊は自然と彼女のために道を開いた。そのくせ、舐めるように淫らな視線を彼女にはわせた。花嫁は目尻に嘲けるような色を浮かべた。おそらく彼女は自分の美貌の効果を知りぬいているにちがいない。見よがしに豊かな胸をさらせて、間を抜けた。垂れた前髪が額にくっきり驚えられている。ふくよかな頬にも、わずかな身のこなしにも、農婦にはないなまめかしさが、香のようにたゆんだ。

彼女は老婆と並んで、薄暗い奥へと進み、漆喰作りの閑帝像に線香をあげた。床にひざまずき、これからの庇護を祈って何度も老婆といっしょに拝んだ。そのたびに彼女の腰が微妙に揺れて、私の視線を吸いつけた。

花嫁は無駄に私たちの心を乱しただけで、泰然と祈りをすませて、門外に去った。兵隊たちは呆然と彼女の後ろ姿

を見送った。加藤が奥から目を光らせて近寄ってきた。私を見るなり

「軍医殿。いい女ですな」

と、語尾をのばして感嘆した。

「あれは李趙文の嫁ですわ。嬢になってしまふ。あれが李に今晚抱かれやがるんだ」

しかし、そういうわれても、私は村民の誰とも交際がなかった。そのことを加藤にいうと、まわりへ聞こえるほどの大声で

「軍医殿。李は村の百姓ですわ。榕樹を軍へ供出したので知ったが、腦天壞了、お目出たい野郎ですよ」

「よく知っているな」

「知ってますとも。村のことなら自慢でないが、なんでも承知しています。あの女だって……」

と、鼻の頭に汗を浮かべた。

「軍医殿。厦門の酒樓で女給をしていたのですよ。徐桃華」といって、部隊が厦門に上陸して、まだ島へ渡らなかつたころ、行っていっしょに飲んだことがあります。それがいつの間にか島に帰って、李に見染められて結婚だ。実際、世の中って狭い。悪いことはできないものです」

もっともらしく頭を振った。言葉の端に徐への未練が溢れ出ていた。

加藤はしばらく私の顔を見つめていたが、不意に声を弾ませた。

「そうだ。軍医殿。訓練が終わったら李の披露宴へ行きましょう」

「まさか。見ず知らずの家へ……」

「いや、今日、中隊長殿は李に招待されています。警備隊長だからでしょうが、軍医殿だっていうならば地区衛生方面の警備隊長だ。帰ったら、すぐ中隊長殿に話して、私もお供するようにしましょう」

「誘ったって行かないぞ」

「どうしてです。構いませんよ」

まるで自分がもてなすような顔をした。

考えてみるまでもなく、たしかにここは占領地だった。

加藤の誘いについて押しかけたところで、住民がにべもなく断わる場合は、まああり得ない。駐屯隊長の意図にそむけば、どんな結果がくるかを、子どもでも知っている。綺麗な花嫁を脊に一杯飲むのも、けっして悪い趣向ではなかった。ただそれを実行するには、多少なりとも押しの太さが必要だった。その上、悪いことには、先日、私は閑に任

託をすこし調査してみた。不備

いの輪郭をつかんだだけでも、

皇兵の生活は決して生きざしくなかった。

この島は日本でいって淡路島くらいの大きさである。中央は大武、双乳の名で呼ばれる岩山が占めてその麓、海岸べりにしか、人の住むのを許さない。そのわずかな土地の

中に、四万五千の住民が細々と暮らしていた。耕地は少なく、そのために小作料は南支一（ということは中国一と同じだが）にせり上り、できるのは甘藷に麦、南京豆と甘藷がわずかばかり、それに阿片があるだけだった。働きたくも土地がないので、昔から皆出稼ぎに行く。厦門はそれら出稼ぎ人の根拠地として発達してきた町だった。

男は食えなくなると苦力、海賊になり、女は娼婦に売られて行った。残りはそれらの者の仕送りに頼って生きる。けれども、戦争が出稼ぎの道もふさが、南方からの送金も杜絶した。人口は殖え物資は減った。そこに日本の陸軍部隊三千が割りこんで、畑であらうと宅地であらうとかまわずに軍事施設を構築しだったのである。いくら原住民でも、貧乏人を必要以上にいじめる手はない。私は誘いを断わった。

しかし、加藤はいったん決心すると、もう夢中で自分の思いつきにとびついた。訓練の時とは別人のように張りきった。課程をすませて私が関帝像を眺めている間に、隊へ帰って一装の軍服に替えてきた。兵隊としてはせいっぱいの盛装である。とびつくように私の前に立ち、中隊長がそのつもりできて、待っていることを告げた。

その言葉通り、小林中尉が廟の門前に軍刀を引きずって立っていた。

中尉はいつも朝から酒びたりなので有名だった。今日も噂通りの日課を着実にふんで酒気の入った体をだるそうに

ゆすつた。中年肥りで首が短い。古い一年志願將校で、故国では一かどの株屋で通るそうである。

中尉は腹からズボンを少しずり落としたまま、待ちかねたように廟に沿って歩きはじめた。

「牧君。早いところ行こう」

加藤もいっしょに肩を並べた。

「いや、待って下さい。自分はいいです」

「なんだって？」

中尉はもつれた舌で叫んだ。ふり返ってやにわに私の肩を抱えた。酒臭い呼吸がかかった。

「遠慮するやつがあるか。おれがせっかく連れて行こうというのに」

「でもね。相手は貧乏人でしょ」

いい終わらないうちに、腹をゆすって笑いはじめた。

「ハハ、何をつまらん気を使っている？ いいのだよ。手にはやつの樹を買ひあげた時、ぎょうさん銭をくれてやつこつた。さうさ、吉番さう争はれるのだ。皇軍に感謝の

ろうが。遠慮することはな

「しかし……」

「煮えきらん男やな。では牧少尉。中隊長命令だ。牧少尉へ中隊長ニ随行スベシ。とうや、これで文句がなからう」

だんだん腹をたてはじめてきた。押問答中、加藤はわきでじっと、様子を見ていた。

「軍医殿。遅くなるといけません。さあ急ぎましょう」
せかせかと先に立って歩きはじめた。私はよろめく中尉に肩を抱かれていいのいい杖代わりにさせられた。

廟から下はすぐ海岸で、大きな生簀ができている。そのまわりに十軒余りの部落があった。昔は入口に数本の榕樹が茂っていたらしかったが、今はどれも根もとを残して伐り倒されていた。そのせいか、妙に寒々しい石門のわきから、わずかに柘榴が一本細い枝を張っていた。その下に暗れ着姿の島民が群れていた。汚れた褲子一つの子供たちが喜んで、そのまわりを跳ね廻っていた。中から劉通訳が近寄ってきた。

「アア隊長、イラッシャイ」

今日は彼も盛装で、黒い袴の袖を替そうに折り返していた。この台湾生まれの農民は駐屯後、会うたびに服装がよくなり贅肉をつけて、今では大人らしく振舞っていた。ただいつも変わらぬ——私が医者だけに気になったのだが、陽に焼けた肉づきのいい右頬に二つ、暗紫色の梅毒疹を吹き出していた。劉は煩さそうに裸の子どもたちを叱った。

「鳳凰双重瑞祥満堂」と朱聯を掲げた、わきの小さな民家の入口に瘦せこけた老人が立っていた。珍らしく北京語で「請進來罷（どうぞお入り下さい）」

にこやかに礼をした。入口の土間には紫檀の、剣げた卓子が二つ並んでいた。私たちは老人の案内で奥の卓子につ

かされた。まわりの粗壁には結婚祝いの栢榴や蓮の絵がけ
ばけばしく貼られていた。その安手な飾りのために、かえ
って正面の小さな祭壇が煙み黒ずみ、貧しく見えた。

土間の隅には鋤頭（鉞）や糞肥（堆肥かき）、小鄧（薯掘
り鉞）が三、四本寄せかけてあり、天井からは種子を入れ
た袋が垂れ下っていた。

誰も私までできたのを不思議がり、迷惑がる様子をしな
かった。

小林中尉は祭壇を背にして、どっかり椅子に腰を下し
た。加藤もその隣りに腰をかけた。

「劉、通訳しろ。……この牧少尉は日本の偉い医先生だ」
中尉は大袈裟な身ぶりで私を指した。

「ええか。先生は日本の東京で、大病院を経営していて、
院長だった。だから軍隊でこそ少尉だが、実際は医先生と
して大將級だ。お前たちも今後病気をしたら、この大先生
に診てもらえ。そう思って、お前たちのためにちょうとい
い機会だから、今日おつれしたのだ」

「中尉殿」

私は思わず中尉の赭ら顔を見た。

「自分は大医先生ではありません。が、それは別として
も、葉の補給がありません。上陸以来大分使ったので、葉
の残りがじゅうぶんない。困っているのに、この上住民に
押しかけてこれたら、兵隊の治療にさしさわります」
「ハハ、賢子兵法ヲ知ラズか。牧少尉もええ男やが、宣撫

の方法を知らん。きたらええ加減に齒磨粉でもやればええ
んや」

「そももいきません」

いい返しているうち、劉が老人に中尉の言葉を通訳し
た。老人は皺の多い顔をほころばせて「大夫先生」と私を
見た。仕方なく、うなずくと、劉がいった。

「この爺さんはね。李の伯父さん、水頭の小学校長よ」

「ほう」

まずいことになったと思った。水頭の小学校なら、今、
私たちが接収して軍病院にした、そのため学校は行くところ
がなくなり、休校状態をつづけているのだ。一見、愛想
のいい老人の心底がなんとなく薄気味悪い。幸い、彼はす
ぐ他の客に呼ばれた。李に父親がなく彼が親代わりになっ
ているのか、来客は彼にいずれも叩頭し、すぐ土間の横手
にある房（部屋）へ入って行った。その中には、出てくる
と同時に、別の卓子につかされる老人もある。房に入りき
れない来客が順番を待って土間に溢れてきた。

「うるさいな。何やあれ？」

中尉が顎をしゃくった。劉は吹出物のある顔を淫らに屈
した。

「隊長。あすこは二人が寝る部屋よ。いいなあ。でも二人
気の毒、今晩は眠れないよ。お婿さんとお嫁さんと二人、
寝台に坐って一晩中お客さんに会うよ。だから今晩はお預
けよ」

「そりや不自由やな」

中尉は気がなさそうに呟いた。

「それよりも、早う馳走を出せて劉、催促してこい」

劉は笑って立った。老校長は困ったような表情をした。

別の卓子にはまだ來客が揃わない。加藤までがそばへ行き「酒、酒」と飲む真似をした。それから客の頭越しに寢室を覗いて

「見えません。こういうっぱいでは嫁さんがどこにいるかわかりません」

つまらなそうに首を振った。

ようやく別の卓子にも農民風の老人たちが席を埋めた。料理が何品も運ばれてきた。分不相応なご馳走だった。

「乾杯」

まわりにざわめく人々をよそに、卓子の老人たちが立ち上って乾杯した。私たちもそれにならった。中尉は乾杯を終えて腰を下すなり、眼をすえて私の前に顔を近づけた。

「牧少尉。おたがいに良かったな」

「なんですか」

「敵さんが沖繩へ行ってよ」

「ハア」

「われわれのために乾杯しよう。万歳」

「万歳」

劉もわきへきて腰をかけた。にこにこ笑っていっしょに乾杯した。この台湾人にはどれほどの実感があるかはわか

らない。しかし、中尉の放言はやはり、私の胸にあの頃の想い出を呼び、「實際生きていてよかった」とうなずいた。

——憶えば去年の夏である。サイパンやグアム島が玉碎したあと、私たちはこの金門島へ死にきたのだ。そのころの情報によると、米軍はモロタイやペリリュー島に上陸してから、比島をつき、次に南支へ上陸し、中国軍と協同作戦をすると考えられていた。その場合南支の敵上陸地点は、湾が広くて大艦隊の集中に便利な厦門港しかない。厦門市には、日本の南支艦隊司令部もある。しかし今では駆逐艦、海防艦各一隻を残してその勢力のほとんどを失っていた。これだけではとうてい米軍の來攻を防げない。だから私たち陸軍部隊が湾内の要衝金門島に飛行場を設け、米機動部隊を邀撃すべしと命令され、米空軍の爆撃を受けながら島へ渡った。

けれどもここでいったい、何をしたらだろうか。中央の岩山は工兵隊の全力をあげても爆破が進まず、ついに洞窟陣地を作れないので山裾の丘陵から海岸沿いの畑を掘って、塹壕を作った。それはベトンで固めた砲壘ではなかった。手当りしだい生えている榕樹を伐って、杭木にし、その上へ土を被せて厚くしてはみたものの、艦砲射撃を受ければもちろん紙のように吹き飛ぶ。それでも私たちは自分たちの生命を守るため、夜に日をついで壕を掘りまくり、目を血走らせて斬込み演習をつづけた。

しかし、飛行場を作っても友軍機はこず、たまたまきてもすべて墜^{おと}された。私たちは海軍の応援も頼めず、守る方法もなく、刻々迫る米軍の動向を戦々競々として見まもった。

そのうちついに比島は陥ちた。次にくるのは、金門島玉碎^砕? 私も死の用意をした。

その時である。思いがけない奇蹟が起こった。米軍が、中国へ寄り道をする時間を惜しんだ。いっきょに南支那海を北上して遙か北の沖縄へ殺到して行った。

その結果危うく私たちは玉碎を免れ、ふたたび生きる希望を与えられたのだ。いま私たちが完全に遊兵となっていないのも、私たち自身の責任ではない。

私たちは改めて杯をとり、自分のために感慨こめて飲み乾した。中尉はますます酔ってきた。ほとんど体を卓子の上^{うへ}にのしかかるようにして

「加藤、李の嫁さんなんかどうでもええ。早う後浦^{こうほ}へ行こ」
うつつに叫んだ。加藤はすぐ返辞をして箸をおいた。

「後浦へ? 中尉殿。これからですか」

と、思わず私は聞いた。ここから後浦までは一里余りある。後浦こそ私の知るかぎり、島でただ一つの町である。行政機関もあり部隊の本部もおかれてある。商店もあり、農民たちが集まってきたり市も立つ。酒樓も一軒あり私たちの僅れの場所だが、ただそこへ行くには山裾の丘陵を越えて遠浅の湾を徒歩で横切らなければならない。

「中尉殿。歩けますか」
「ハ、ハ、心配するな」

と、中尉は軍刀を握ってよろよろ立ち上った。それからほかの客に構わず大声で

「牧少尉。ええかな。後浦なら商店の女店員やて、酒樓の女給やて寝るで。加藤がそこらのところはよう知っている。島へ戻った厦門の女学生やて、一千元出せば御^おの字や」
事もなげに笑ったが、少尉の月給は五百元、中尉にしても七、八百元のはずだった。

「牧少尉。ええ穴があるんや。うるさいで、今日はほかの小隊長どもや准尉を連れてこなんだったが、貴公ならええ。行くかね?」

「そうだ。軍医殿。ごいっしょにどうです? 慰安所(軍公認娼家)なんかは将校の行くところではありません。もっと気のきいた所へ行きましょう」

わきから加藤もいった。しかし私には隊長の機密費がない。同行を断わって立った。まだ混んでいる来客を分けて、帰る出がけに人たちの間から、寝台の赤い帳が見えた。徐たち新婚夫婦は人に隠れて見えない。劉は私たちを見送ったあと、飲み足りないのか、まだ李の家に残った。

2

中尉たちに別れて宿舍へ戻ると、ここでも同僚たちが酔っていた。食堂にしている二階の堂の正面には、天地君の

神位に並んで、うやうやしく厦門産の日本酒が何本もあげられていた。その前の卓子の上にはまだ明るい夕方の外光に照らされて徳利が何本か倒れていた。陶然と赤い顔を並べた同僚たちから、いっせいに「遅いぞ」とどなられた。「遅れた罰だ。牧少尉には配給するのをよそう」

「ハハ、それも可哀そうだ。」一杯飲ませてやれよ。牧少尉。今日久しぶりに部隊長が厦門から帰ってきたのだ。厦門土産の酒の特配だ」

「いい部隊長だよ。自分だけ厦門でいいことをしてきたのではばつが悪いと思うのだろう。将校だけに、ほら、一人あたり二本ずつ陣中見舞だ」

庶務主任が豪華に並んだ一升瓶を指さして

「ハハ、当分飲める」

皆襟衣まで脱いで裸の胸を叩いた。この二階は堂を中心に六つの房が両側に並び、それが私たちの居室になっていた。祭壇の対面はベランダになっていて、そこからしだいに露に包まれかけた、家主の芋畑や、わきの荒れた小学校の棟、待避壕や、火焰木の並木が見えた。皆は階下の兵室に聞こえるのも構わず、大声で軍歌を合唱しはじめた。時々ベランダへ出て下の庭へ向かって音高く放尿した。それでも途中で気がさして堂の後ろの下士官室へも一本届けた。間もなく、そこからも濁み声の民謡や拍手が聞こえはじめた。騒いでいるうち、とうとう夜になった。ベランダの正面には火焰木の高い梢を越して、南十字星が輝きはじめた。

部隊長は沖縄戦以来、ほとんど島にいつかない。こんな田舎の島で兵隊相手に暮らすよりも、市の大半が明るい公園になっていて、日本人の商社も多数進出している、その上、日本の料亭、芸者の群れや日系映画館まであって、娯楽機関に事欠かない厦門の魅力に――彼も人間だから惹かれたのだろう。もともと敵機の定時監視の間を縫って大発を飛ばせば、二時間で行けるのだったが、他の者には行ける自由がなかった。その代わり、時々、部隊長から厦門土産の特配がある。皆は部隊長の噂をしながら、油灯をともして遅くまで飲んだ。酒に飽きて麻雀と碁になった。

私はひとりベランダの手すりにもたれて同僚たちが騒ぎながら牌を掻き廻しているのを、ほんやり目を細めて眺めた。今日も一日なんということはなしに過ごした。火照る頬を手すりの漆喰に冷しながら、私は刻々失われて行く時間の重みを計った。一分、一分、私の貴重な三十代がむなしくここで過ぎ去って行く。とび去った時間は、もう私の手に戻らない。酒が沈んでしだいに感傷が湧いてきた。本来の自分になんのかかわりもないくせに、しかもそこから逃れられない軍隊という檻。金門島の一頁。しかし、この島でも今日結婚した二人には、それなりに生活の設計もあり、喜びもある。だが、おれはひとりだ。

「ええっ、娯家へ気晴らしに行ってくる」

性急に部屋へ戻って軍刀をつけ、長靴を履いた。食堂へ戻って皆に宣言した。

「フン。牧少尉。嫁さんを見て気が立っているな」

外科主任だけが脾から目を離していった。

慰安所には、他に客がなかった。広東や厦門生まれの娼婦たちが退屈そうに遊んでいた。その誰もが毎週二回私の検梅を受けにくる。検診台で診る味気ない彼女たちの生殖器、だが警備隊長と違って、私はそれを抱くしかない。

部屋には粗末な寝台の他に卓子があるだけだった。わずかに脱ぎ棄てられた娼婦の服が、一刷毛の艶かしさを漂わせていた。女は服も褲子も脱いで、若い、汗ばんだ肌を擦り寄せてきた。

その職業的な技巧がかえってまた故国の妻を想い出させた。私にも今日の二人同様、新婚の夜があった。下積みの研究生活、ささやかな開業、それがどうやら看護婦の一人もおけるようになって召集を受けた。転戦。転戦。そして、この島へ渡ってきてから、全くたがいになり交す術をなくしてしまったのだ。おそらく今ごろは東京で、妻は家もろとも、空襲のため灰と化しているのだろう。だが、だからといって私はそれをどうしようもない。乳房を娼婦に弄らせたまま、手を組んで天井をいつまでも眺めつづけた。

上空で爆音がしてきた。敵機の夜間巡視である。私は弾ね起きた。軍袴を着けようとすると、娼婦が乳をおしつけて抱きついた。

「^{アメリカ}国の飛行機、住んでいる人のところや廟へ爆弾落とさない。ここ安全。病院へ帰ると危いよ」

それから起きたついでというふうには、裸のまま土間の鞋をつっかけて隅に行き、卓子の下から馬桶（便器）をひき出した。笑って

「日本負けるか」

いい終わらぬうちに激しく尿の音をさせだした。彼女は快よさそうに目を細めた。私は寝たまま爆音に耳を傾けた。ようやく敵機は事なく過ぎたのを確かめてからきまり文句で打消した。

「いいや、日本が勝つ。誰がおまえにそんなことをいったのだ？」

「兵隊さんいったよ」

「そうか」

女は放尿を止めた。馬桶の蓋を閉じて眠そうにあくびした。彼女には、日本が勝とうが負けようがどうでもいいようだった。そのまま寝台に戻ると、薄い蒲団をまくってわきに体を滑らせてきた。

「^{スリッパ}睡床、睡床（眠ろう）」

足を絡ませて、また私の胸に頭を埋めた。

3

「日本が勝つ！」と私も人にはいう。だが部隊の誰が日本の勝利を信じていよう！ 私たち大陸の歴戦兵の間では、

島へ渡る前から、もう敗戦後の日本が話題になっていた。地図にこそ占領地帯と広く赤く塗られているが、実質はわずかの拠点を確保できない、日本の戦力の限界を皆、生命をかけて悟らされていた。

金門島に渡ってきて、沖繩ならまだ戦えるだけ浮かばれる。ここでは戦う陣地がなかった。絶望は沖繩戦で救われたものの、沖繩でどれだけ日本軍が戦えるか、敵の短波放送は軍発表と食い違っていた。それに、島の海軍分哨からも特攻機の失敗、特殊駆潜艇の特攻攻撃が無効に終わったことも報告されてきた。ある日、その分哨の報せで皆、岬に駆けつけ手を振った。日本の航空母艦が護衛も遅れずに一隻沖を通って行く。積んでいるのは飛行機ではない。戦闘を止め油槽船に早代わりして、南方のガソリンを内地へ運ぶ途中であった。日本にはもうガソリンがない。飛行機は飛ばせない。あの航空母艦の積んだガソリンだけが最後の頼みの綱と説明された時、「頑張れよ」声をかぎりに叫びながらも、日本の敗戦が動かし難い信念に育った。

敗けたくない。いや日本は敗ける。敗けたらどうなる？ 果てしない自己問答の末、落ちついたのはどうにもならない諦感だった。私たちは心の張りを失い、戦争をさへ他人のすることと見るようになった。ある時、内地からの機帆船が島の目の前で撃沈された。負傷した乗組員が病院へ運ばれてきて、内地のせっぱつまった様子を伝えた。焼ける街、転がる屍体、さまよう難民、歯を食いしばって増産に

のたうつ姿を話しながら、彼らは不満をぶちまけた。

「なんだい？ 戦地の方がよっぽどのんびりしている」

「おっさんよ」

と、それに向かって兵隊が答えた。

「だからどうだっていうのだ。おれは沖繩へ応援にも行けないし、内地でいっしょに働くわけにも行かないんだぜ」と、それが精いっぱい抗議でもあり主張でもあった。それは兵隊のいい分だけでない。私も同じ気持ちだった。内心は日本の運命を諦めきって終戦を待っている。

それでいて、他人から、中国の娼婦などから「日本が敗ける」といわれたくない。そんな言葉を聞いた途端にカッとなる。心の痛い部分を逆なせされたくなかった。

翌日の午後、診療を終えると、私は部屋にこもって医学書を読んだ。机代わりの梱包箱コンパウボックスの前に坐ると、それだけで気持ちと和らぎ落ちついてきた。この部屋も厚い木の扉で入口をふさぐと、わずかに小さな窓が一つあるだけ、まわりの壁は漆喰が剥けて下の煉瓦が覗いていた。いわば牢獄にも似た狭い房である。それでも久しぶりに目をさらす活字が、これまでの生活の乾きを教えてくれた。それは何度ともなく読んだ本であり、簡単な治療書だったが、それでも読書の楽しみはあった。

それから快く疲れた頭をほごしに、階下へ降りて、兵隊たちが慰みに飼いはじめている兎を眺めたり、六メートル

余りの大蛇の皮が乾してあるのを眺めた。兵隊たちは国への土産にこの皮を持ち帰り、女房のハンドバッグにするのだと嬉しそうにいった。

「軍医殿にも、よく乾いたら切って差上げます。奥さんへ持って帰って下さい」

「有難う」

帰還の日がいつかはわからず、妻の生死も覚束ない。それでも、心を惹かれる幻想だった。椿の咲いている庭へ出て

「ちょっと散歩してくるよ」

「行っちゃい」

兵隊は仔兎を胸に抱えていった。

相変わず、日向で雑談している砲兵隊の兵隊を分けてぶらぶらと坂を上った。雲雀が鳴いている。空は明るい透明な青だ。後浦へ通じる軍公路には、蒲公英、野薔、すみれなどが道わきに咲き乱れていた。じっとり湿った土の色。光を躍らしている疎らな竹林、青い海、後ろから明るい鈴の音がしてきた。

振り返ると栗毛の驢馬に若い男女が二人合乗りしていた。鈴は驢馬の首に二つつけられていた。歩きたびに弾んだ音があたりに散る。若い瘦せた男が、青い夏衣をつけて前に跨っていた。その後ろから男の胸にしっかりと腕を廻した若い女が、昨日の花嫁だった。今日は朱の服を着て、伸ばした足を絶えず宙に振っていた。通りすがりに彼女と

視線が合った。白粉を塗り紅をさし、薄い唇の端に今日も挑むような表情を見せた。おそらく新婚の挨拶廻りの途中だろうが、加藤のいった彼女の前歴や小林中尉の言葉が甦ってきた。

加藤のように李を嫉妬する気持も湧かない。むしろ、彼女の動きが派手だけに、かえって年寄じみた気分をそそられ、こんな女は遊び相手としては面白い。だが、女房としたらどうだろう？ 首をかしげて見返した。男はまだ少年の面影をとどめていた。三日月型の眉が開いて、目尻も下り、いかにも人が好きそうだった。彼は私を警戒して緊張し、驢馬をそっと進めた。そして通りすぎたとたんに、強く拍車を入れた。驢馬は首を振って駆け出した。徐は嬌声を張りあげ、李に抱きついた。

私は李の小心に苦笑した。

その後も一つ村うちのことである。時々連れ立って歩く二人を見かけた。そんな時いつも徐桃華は色物の長衫を着て、唇に紅を塗っていた。それは彼女の境遇——農婦にしては、いつも「正月気分」でいるように見えた。ほかの農婦たちは誰もが夕方遅くまで草帽（麦藁帽）を被り汚れた長袖姿で跣のまま働きつづけているのだ。自然と、彼女の姿は兵隊たちの噂に上った。彼女は私たちの視線が集まると、ことさら笑って李の手をとった。李はてれ臭そうに体を締め、用もないのに何度も私たちにおじぎして、愛想笑いを浮かべた。